

# 時間的展望と抑うつ傾向の関係について

## — 統制の所在との関連性から —

齋藤 貴彦<sup>1</sup> 井上 忠典<sup>2</sup>

臨床心理学の研究領域における時間の研究のひとつに、個人の過去・現在・未来に対する意味づけを表した時間的展望がある。これまでも時間的展望と抑うつとの関連性については先行研究においてなされてきたので本研究では動機づけ理論に端を発した「統制の所在」と併せて考察することを目的とした。まず、時間的展望・統制の所在・抑うつとの三者の関係について調査するために大学生を対象とした質問紙調査を行い、その結果について構造方程式モデリングを用いて分析したところ、統制の所在と抑うつが互いに負の相関を持ちながら、時間的展望に影響を及ぼし、時間的展望の中では過去と未来への影響が大きかった。また時間的連関性を低くする効用の可能性を検討するために、質問紙調査で得られた時間的連関性の低い大学生を対象に、現在に対する時間的展望及び統制の所在を独立変数、抑うつを従属変数に対する2要因の分散分析を行なったところ、双方の交互作用は有意とはならなかった。よって、時間的連関性が低い状態で抑うつ傾向を低く保つには他の変数が関与しているという可能性が示唆された。

キーワード：時間的展望、統制の所在、抑うつ、サークルテスト、大学生

## 問題と目的

### 1. 序論

Heidegger が「存在と時間」なかで『「存在の意味」とは「時間性」のことであり』と述べている様に（北川, 2002）、時間という概念は有史以来、人類と共に共存し続け、常に我々に存在の意味を問いかけ続けてきたものであるといえる。我々は普段は自分の存在そのものについて深く注意を向けることはさほどないかもしれないが、言い換えればこの「自分の存在とは何か」という問いかけは、哲学や自然科学の領域において人類が挑み続けてきた壮大なものともいえる。また近年、うつ病をはじめとする精神疾患の増加が問題視されて久しいが、このうつ病の気分の一つとして「時間がなかなかたたない」「未来がない」「過去の失敗ばかり思い出される」といった時間体験の異常がある（笠原, 1996）ということからも、抑うつという病態像と時間感覚との結びつきは臨床心理学領域における研究の切り口として、十分な有用性があると考えられる。

具体的に挙げると、うつ病者は未来の広がり小さく過去の広がり大きい。さらにうつ病者の未来は、未知や偶然の開いた未来ではなく過去の反復にもとづいてある程度予測可能な閉じられた未来であるといわれる（村田, 2012）。これらのことより、うつ病

者の時間は、とかく過去の支配力が大きく現在や未来がそれによって封鎖されているといえる。更に抑うつ的なパーソナリティの人はそうでない人に比べて過去の不快な出来事を想起しやすく、また快な出来事を想起しにくいなどの結果もみられている（神谷・伊藤, 2000）。よって本研究では抑うつと時間感覚の関連性について研究することを目的とする。

### 2. 時間的展望

臨床心理学領域における代表的な時間研究のテーマとして時間的展望の研究がある。この源泉をたどると Lewin により「ある一定の時点における個人の心理学的過去と未来について見解の総体」と定義されている概念であるといえる（都築・白井, 2007）。しかしこの概念はその後の研究者により多様化してしまったので統一した見解を得ることが難しい。そこで本研究では、都築（1999）の「個人の心理学的過去・現在・未来の相互関連過程から生み出されてくる、将来目標・計画への欲求、将来目標・計画の構造、および、過去・現在・未来に対する感情」という定義にのっとることとする。

時間感覚と精神病理との関連は古くは Janet や Minkowski の時代から称えられており、1950年代には Erikson, E.H が自身の発達理論において自我同一性との関連を述べている。その後1990年代以降にテーマが多岐に広がり、その中のひとつに、「抑うつに対するバッファーとしての時間的展望の効果」といった

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

ようなより実践的な臨床の問題と関わる研究がある(都築・白井, 2007)。日潟・齋藤(2007)は、時間的展望とGHQ28の関連を検討し、過去・現在・未来の全てに肯定的な時間的展望を持つ者は精神的健康が高く、その逆は低いという結果を得ている。こうした研究動向の変化は、薬物療法の進展にともない、うつ病をはじめとする精神障害者のリハビリテーションや生活の質の向上が新たな課題として浮かび上がってきたことに関係すると考えられる(都築・白井, 2007)。

このことから適切な時間的展望を持つことと、抑うつの緩和は相互に影響を及ぼしあっていることがわかるが、この問題をより深く考察するためには次項で述べる統制の所在についても言及する必要があると思われる。

### 3. 統制の所在

統制の所在はRotterの提唱した社会的学習理論に基づくものであり、これは強化を獲得するための一般的期待を内的統制と外的統制に二分したものである。前者は、自分の行動の結果として強化が生起すると認知している場合で、後者は強化の生起には自分の力では対処不可能な力がはたらいていると認知している場合を指す。一般期待は過去の類似する状況からもたらされた成果の確率に関する信念であるので(水口, 1984)、これは時間的展望と密接した概念であると言える。つまり、LewinやRotterにならい個人をひとつの関数と考えた場合、統制の所在という入力個人を経過して時間的展望という出力としてもたらされると考えると、時間的展望を考える上では統制の所在という概念は重要な位置づけにあるといえる。

白井(1991)は時間的展望から派生した時間的信念と統制の所在の関連を述べており、時間的信念尺度の下位尺度である「将来無関心」は外的統制の傾向が見られ、「現在重視」は内的統制の傾向が見られることがわかった。また、杉山(1996)は、内的統制型の方が目標指向性や未来の展望が確立されることを明らかにしている。そして、「時間的展望という個人の心理的側面は本来、自発的に確立されるものであり、他者から与えられるものではないゆえに、時間的展望を直接的に変容するという手法をとることは難しいときも統制感を上昇させる技法が有効な援助の手段となりうる」と述べている。

### 4. 問題と目的

以上の研究から時間的展望と抑うつ、統制の所在と時間的展望との関連性が明らかにされてきた。更に、内的統制感と低い抑うつ状態との関連も明らかになっている(Burger, 1984)。しかしこの「時間的展望」「統制の所在」「抑うつ」の三者の関係を取り扱った研究はこれまで確認されていない。よって時間的展望の背

後にあると推測される統制の所在や抑うつを加味した考察が可能になるのではないかと考える。

しかしこの三者関係については別の側面からも検討する必要がある。Beiser&Hyman(1997)は、難民に対して行なった構造化面接により、逆境条件においては過去・現在・未来が分裂され、過去が抑圧されることは、むしろ適応的な方略となり、抑うつのリスクを緩和することを見出した。このことは困難な状況を乗り越えるには時間的展望の下位尺度間のつながり、すなわち「過去・現在・未来が結合しているという実感」と定義されている時間的連関性が関わっていると言える。また心理療法におけるいくつかの立場は、長い未来展望や未来志向性の負の影響性を強調し、時間的展望など全く持たないで現在を完全に生きることがずっと効果的だと主張している(杉山, 1995)。

すなわち端的にいえば「運を天にまかす」という外的統制型の認知スタイルは一見投げやりで不適応な生き方であると考えられるが、現在を重視した時間的展望と時間的連関性によりバランスをとることは、抑うつ緩和することと何かしらの関係があると考えられる。

### 5. 仮説

以上のことより、本研究では以下の仮説を検証することを目的とする。

#### 【仮説1】

統制の所在と抑うつは相互に影響を及ぼしあって時間的展望に作用している。

#### 【仮説2】

時間的連関性が低い状態であっても、統制の所在が外的統制型であり、現在を重視した現在指向型の時間的展望であれば抑うつの度合いは低い。

## 方 法

### 1. 予備調査

前述した仮説2の検証において、時間的連関性を測定する目的で使用されるサークルテストはCottle(1976)が回答者に3つの円を描かせることによって時間的展望を投映法的に測定することを目的として開発したテストである。実際には円の相対的な大きさは時間的優位性を、円の相対的な位置は時間的連関性を表す。我が国においてもサークルテストを使用した研究は十数例確認されているが(奥田, 2014)、サークルテスト自体の妥当性及び有用性について自由記述を用いて調査したものは見られなかった(日潟, 2008)。よって予備調査としてサークルテストのみを実施し、本研究への使用の是非を検証する。

#### 1-1. 予備調査対象者及び調査時期

2014年7月中旬に県内私立の大学1年生から4年生、計158名(男性76名, 女性82名, 18-37歳, 平均年齢

19.5歳, SD=1.64) を対象に質問紙調査を行った。

### 1-2. 予備調査の内容

#### (a) フェイスシート

調査内容の概略, 注意事項, 回答方法, 性別, 年齢, 学年, 所属学科の項目を記載した。注意事項には, 調査結果は研究のためにのみ使用されること, データの保管と管理は厳重に行われることなどを記載した。

#### (b) サークルテスト (Cottle, 1976)

過去・現在・未来を円に例えて描画させる方法であり, 本研究では時間的連関性を測定する目的でこのテストを採用することとした。また調査に用いた質問紙の上部に以下の教示文を提示した。「過去・現在・未来が円の形をしていると考えてください。下の空欄にあなた自身の過去・現在・未来の関係をどう感じているか, 3つの円で描いてみてください。描き方は自由です。それぞれの円の大きさが違っていても構いません。」

ん。」

また, Cottle (1976) のサークルテストでは描画結果をスコアリングすることが可能であり, 時間的連関性については2つの円が離れている状態を0点, 接しているものを2点, 交わっているものを4点, 互いに内包しているものを6点として, 過去 - 現在, 現在 - 未来, 未来 - 過去の全ての組み合わせについてスコアリングする。スコアリングの後, 各組み合わせの合計点を算出するため, 最低点は0点, 最高点は18点となる (Figure1)。

更に予備調査ではサークルテストの妥当性・有用性を検証することを目的とするので, サークルテストの教示文に加えて“それぞれの円の位置はあなたにとって何を表していますか?” という自由記述形式の設問を設けた。

### 1-3. 予備調査の結果

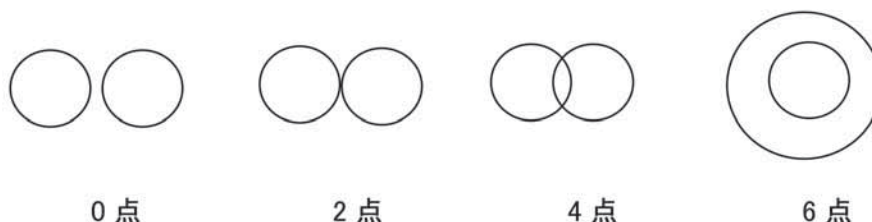


Figure 1 サークルテストのスコアリング

Table1 予備調査におけるサークルテストの得点分布

点数	0	2	4	6	8	10	12	14	16	18
N (人)	66	3	18	10	22	8	9	0	4	10

Table2 サークルテストの自由記述

時間的連関性の点数	自由記述
18	過去現在未来の関連性
18	過去は現在の一部、現在と過去は未来の一部
16	過去と未来の間に現在がある
8	過去があるから現在があり、現在どうするかで未来が大きく変わる
8	現在に過去も未来もつながっている
8	人生は途切れないのでくっついている
6	過去は現在とかるうじてつながっている。現在の行動しだいで未来は変わる。
6	過去と現在とはとらわれている。現在と未来は少しつながっている。
4	過去現在未来がつながっていると思う
4	過去と未来のことは考えたくない。だから現在と離れている。
4	過去があって今がある 今は未来に影響するかはわからない
0	過去は過去、未来はわからないので円は個別
0	過去と未来は現在あまり意識してないので離れている
0	過去はいろいろ考えてしまうので近い、未来は誰も知らないで遠い
0	昔は昔、今は今、未来は現実感ない
0	その時その時を生きているから

調査の結果から、調査対象者のうち未記入のもの、不備のあるもの、判定不可能なものを除いた150名（男性71名、女性79名）を分析の対象とした。

#### (1) 時間的連関性の分布

Cottle (1976) に従い、時間的連関性の点数を算出したところ、上表の様な得点分布となった (Table1)。最も多い点数は0点であり、全体の44%を占める結果となった。

#### (2) 自由記述

予備調査で用いた質問用紙に記載した設問（「それぞれの円のつながりはあなたにとってどんな意味がありますか？」）に対して得られた回答のうち、時間的連関性を示唆する回答は何かしらの記述があった全体の有効回答107名のうち76名であった。また次頁の表に自由記述と時間的連関性の点数との対応の一例を示す。(Table2)

### 1-4. 予備調査の考察

サークルテストにおける円の距離に時間的連関性が投影されているか否かを自由記述によって調査したところ、記述があった計107名のうち76名が時間的連関性を示唆する記述をしていたことから、サークルテストにおいて時間的連関性を測定するという手法は先行研究で用いられているように妥当であると考えられる。よって、本調査においてもサークルテストを質問紙調査に用いることとした。

しかし時間的連関性を示唆した回答の種類を検討すると、同じ時間のつながりを示すという分類の中にも、自由記述と実際の時間的連関性の点数の間には均一な一貫性の範囲内にとどまらない個人の時間のつながりに対する意味づけが存在しているということも明らかになった。

例えば、「過去と未来は現在あまり意識していないので離れている (0点)」という回答としてはニュートラルなものが多かった一方で、「過去と未来のことは考えたくない。だから現在と離れている (4点)」「未来がいい結果なら過去嫌なことが多くてもそれがあればこそ (12点)」など、時間的連関性という概念を考える上で、その構造の中に個人の意味づけが含まれる場合と含まれない場合があることがわかった。これに類似したものとして白井 (1991) は時間的信念という概念を用いているが、この点においては今後サークルテストを使用する上では更なる調査が必要な点であると言える。

## 2. 本調査

### 2-1. 予備調査対象者及び調査時期

2014年10月中旬から11月下旬に、都内及び県内私立の大学1年生から大学4年生、計290名（男性155名、女性127名、性別記載なし8名、18-28歳、平均年齢20.5歳、SD=1.30）を対象に質問紙調査を行った。

### 2-2. 本調査の内容

#### (a) フェイスシート

調査内容の概略、注意事項、回答方法、性別、年齢、学年、所属学科の項目を記載した。注意事項には、調査結果は研究のためにのみ使用されること、データの保管と管理は厳重に行われることなどを記載した。

#### (b) 時間的展望体験尺度

時間的展望を測定するために、白井 (1994) の時間的展望体験尺度を用いた。「現在の充実感」「目標指向性」「過去受容」「希望」の4因子全18項目で構成されている。それぞれの項目に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

#### (c) Locus of Control 尺度

統制の所在を測定するために、鎌原 (1982) の Locus of Control 尺度を用いた。この尺度は1因子全18項目で構成されている。それぞれの項目に対して、「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた。

#### (d) 日本語版 CES-D

抑うつ度合いを測定するために、島ら (1985) の CES-D を用いた。1因子全18項目で構成されている。それぞれの項目に対して、「ほとんどそんな状態」「かなりある」「少しある」「滅多にない」の4件法で回答を求めた。

#### (e) サークルテスト

予備調査と同様に時間的連関性を測定するため、Cottle (1976) のサークルテストを用いた。

## 結果と考察

### 1. 時間的展望と統制の所在、抑うつの関係について

#### 1-1. 結果

調査の結果から調査対象者のうち未記入のもの、不備のあるもの、判定不可能なものを除いた244名（男性131名、女性113名）を分析の対象とした。

#### (1) 時間的展望尺度の因子分析

主因子法・Varimax 回転を用いて探索的な因子分析を行った。その結果、本研究の質問紙調査の結果においては白井 (1994) における因子構造と一部異なる結果が確認された。よって白井 (1994) の因子構造と齟齬がみられた項目である質問項目4（毎日がなんとなく過ぎていく）、質問項目5（今の自分は本当の自分でないような気がする）、質問項目15（私には未来がないような気がする）の3項目を削除し再度因子分析を行なった結果、まとまりの良い3因子構造となったので、第一因子「未来への展望」、第二因子「過去受容」、第三因子「現在の充実感」とした。

#### (2) 信頼性の検討

上記の3因子構造を採用した時間的展望体験尺度の



Table 3 時間的展望の下位因子, 統制の所在, 抑うつの相関分析結果

	平均	SD	1	2	3	4	5
1. 過去の受容	8.58	3.13	1				
2. 現在の充実	9.78	2.95	.275**	1			
3. 未来への展望	19.8	6.20	.290**	.340**	1		
4. 統制の所在	49.6	7.83	.431**	.365**	.547**	1	
5. 抑うつ	22.1	10.6	-.556**	-.454**	-.598**	-.538**	1

\*\* P<.01

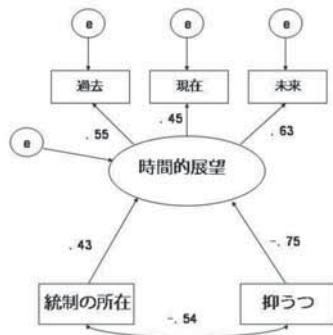


Figure 2 構造方程式モデリング

信頼性係数を求めたところ、未来展望(8項目、 $\alpha = .88$ )、現在の充実感(4項目、 $\alpha = .65$ )、過去受容(3項目、 $\alpha = .78$ )となった。また、Locus Of Control尺度とCES-Dにおいて信頼性係数を求めたところ、それぞれ $\alpha = .79$ 、 $\alpha = .90$ となり十分な値が得られた。

(3) 時間的展望と統制の所在, 抑うつとの相関

「時間的展望」と「統制の所在」との間では、「未来への展望」と「統制の所在」との間の相関が最も高く、やや強い正の相関が確認された。更に「統制の所在」と「過去の受容」、「現在の充実」との間にも中程度の正の相関が確認された。次に、「抑うつ」と「時間的展望」、「抑うつ」と「統制の所在」との間にはやや強い負の相関が見られ、「未来への展望」と「抑うつ」との間の負の相関が最も高い値となった (Table3)。

(4) 構造方程式モデリング

仮説に基づき、時間的展望, 統制の所在, 抑うつとの関係を検証するために、AMOSを用いて構造方程式モデリングを行なった。なお、時間的展望の各下位尺度には各々の合計点数を用いた。適合度指標は、 $\chi^2/df = 1.38$ , GFI = .991, AGFI = .967, CFI = .996, RMSEA = .039であった (Figure2)。

Figure2に示すように、全て5%水準で有意である標準化推定値が得られ、「抑うつ」から「時間的展望」への係数が -.75となり、「統制の所在」から「時間的展望」への係数が .43となった。また「統制の所在」と「抑うつ」の相関は -.54となった。更に、「時間的

展望」からの観測変数は過去の受容 (.55)、現在の充実 (.45)、未来への展望 (.63)となり、未来への展望の係数が最も高い値となり、次いで過去の受容への係数が高くなった。

1-2. 考察

本研究における分析のモデルにおいては統制の所在と時間的展望, 抑うつは一方の因果関係では示されず、統制の所在と抑うつが相互に影響を及ぼし合いながら時間的展望に影響を与えることと、その影響の大きさは統制の所在に比べて抑うつの方が強いことが分かった。更にこの両者の影響は時間的展望の中でも未来展望への影響が大きいことが分かった。

統制の所在が時間的展望に影響を及ぼすということは、杉山(1996)でも確認されており本研究においても、統制の所在が内的統制型になる程に時間的展望が高くなるということがいえた。また、時間的展望と抑うつとの関係については例えば山崎 (2009) では抑うつ傾向の低さと、時間的展望の高さとの関係が述べられているが、両者の因果関係の明確な方向性は先行研究からは特定できなかった。また序論にも記したとおりうつ病者の体験する時間は過去の支配力が大きく、閉じられた未来であると言えるので本研究のモデルにおいても時間的展望からの影響が相対的に大きいのは過去の受容と、未来への展望であるという結果は妥当であると考えられる。

以上を踏まえると、時間的展望, 統制の所在, 抑うつとの関連性としては、統制の所在が内的統制型になり時間的展望が高まるという、先行研究で確認されたプロセスの背後には抑うつが関与しており、統制の所在が内的統制型になると抑うつが低減して時間的展望が高まるという関連性が確認された。更にその時間的展望においては過去の受容と未来への展望に大きな影響を及ぼすことから、「抑うつ状態」で過去が受け入れられないもしくは未来が見えないという状態像には内的統制型を志向したアプローチが有効であると考えられる。

2. 時間的連関性低群の時間的展望と統制の所在, 抑うつの関係について

2-1. 結果

(1) サークルテストの得点分布

Table 4 本調査におけるサークルテストの得点分布

得点	0-4	6-12	14-18
N (人)	136	84	24

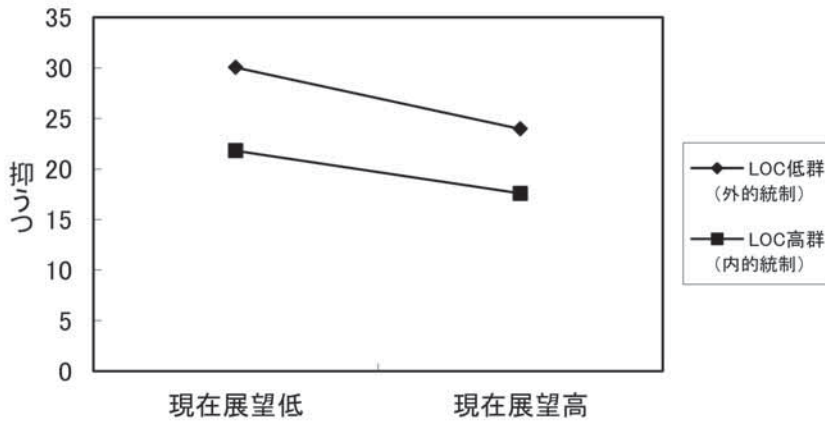


Figure 3 現在の充実と抑うつとの関係

「仮説1の検証」と同じ質問紙調査において Cottle (1976) のサークルテストを用いて時間的連関性を測定した結果、下表の様な得点分布となった (Table4)。

これまでのサークルテストを用いた研究を参照すると、山崎 (2009) や佐藤 (2012) においては0点とそれ以外の点数で時間的連関性無群・有群にしているが、予備調査の自由記述の結果、時間的連関性が2点や4点の記述にも「時間のつながりの無さ」と「先が見えないこと」が対応する記述があった。よって、仮説に基づき本研究ではサークルテストの得点が0点から4点の群を、時間的連関性の低群とし、これに該当した134名を分析の対象とすることとする。

## (2) 分散分析

仮説2を検証するために抑うつを従属変数とし、独立変数を時間的展望の下位尺度である「現在の充実感」(高群・低群)、「統制の所在」(高群・低群)とする2要因分散分析を行なった。その結果、「現在の充実感」の主効果 ( $F(1,132) = 8.004, P < .01$ ) および統制の所在の主効果 ( $F(1,132) = 16.14, P < .001$ ) が有意であった。一方で抑うつに対する「現在の充実感」と「統制の所在」との有意な交互作用は見られなかった ( $F(1,132) = 0.256, P > .10$ ) (Figure3)。

## 2-2. 結果

本研究においては時間的連関性の低群が136名となりこれは全体のサンプル数の総数である244名の約56%を占めている。予備調査における時間的連関性の低群にみられた自由記述と照合すると、現在に対して過去と未来のつながりが低い人の割合が相対的に多かったことがいえる。また、これらの時間的連関性の低群のみを対象とした分散分析においては時間的展望のうちの「現在の充実」の抑うつに対する主効果が認

められたので、過去や未来へのつながりが低い場合にも、現在を受容することと抑うつの低減は関係していることが示唆された。これまでの時間的連関性に関する先行研究において、佐藤 (2012) では「時間的連関性がある場合にポジティブな時間的展望が随伴すれば精神的健康が促される」と述べており、また山崎 (2009) は「時間的展望が高くなおかつ時間的連関性もある場合に抑うつの程度も低い」と述べている。そして本研究では「時間的連関性が低い場合でも現在の時間的展望が高ければ抑うつの程度が低くなる」ということがいえ、これは仮説2を一部支持するという結果となった。

次に時間的連関性の低群に対する統制の所在と抑うつとの関係については、時間的連関性の低群において統制の所在の抑うつに対する主効果が確認されたので、「統制の所在が内的統制になるほど抑うつも低くなる」という結果となった。これは今と過去、未来の結びつきが少ない状態においても「自分の力で何とかする」と思うほどに、抑うつが低減しているということとなり仮説2とは相反する結果となった。

つまり時間的連関性の低い状態においての外的統制型の認知はポジティブな意味づけにはならないことが確認された。加えて統制の所在と「現在の充実」の抑うつに対する交互作用が認められなかったことから、総合的な解釈としてはこの「運を天に任す」という認知スタイルには「統制の所在」と「現在の充実」以外の変数も関与しているのではないかと考えられる。

## 今後の課題

### 3-1. 予備調査

本研究において、サークルテストの妥当性・有用性

を検証するために予備調査として自由記述を行なったが、得られた回答を確認すると Cottle (1976) の提唱したサークルテストの解釈・スコアリングの他にも、回答者のイメージの投影が多岐にわたる可能性がうかがえた。例えば、本研究には用いなかったが、時間的優位性の指標としての円の大きさについても、これまでの先行研究は Cottle (1976) の方法に従い、総体的な円の大きさをスコアリングの指標としているが、3つの円全体が紙面全体に描かれた回答と、回答欄の端に小さく描かれた回答とを同列に扱うべきかという問題があるといえる。

また時間的連関性の指標としても、二つの円の離れている距離についてはスコアリングには反映されていない。また円の描かれている回答欄の位置についても個人々人において特徴が見られた。更に回答欄の水平距離を時間軸、垂直距離を成長度として、単回帰式のようなイメージを投影している回答もいくつか確認された。同じ投影法としての Koch のバウムテストでは空間図式を解釈の対象としていることから（高橋, 1986）今後サークルテストのさらなる発展のために、他の新たな採点の指標の開発・精査が望まれる。

### 3-2. 本調査

仮説1の検証において構造方程式モデリングを用いた際に、各変数の下位尺度は、各項目の得点の合計点として尺度得点として用いた。よって本研究においては「統制の所在」「時間的展望」「抑うつ」の3者関係の概要を確認するとどまっている。今度これらの関係について更に考察するためには、各質問項目を用いたより細かな適合するモデルを組む必要がある。

仮説2の検証においては、前述したとおり、「運を天に任す」という状態像においては、本研究で扱ったもの以外の他の概念が関与している可能性が考えられる。よって学習理論・動機づけ理論に基づき、今回用いた「統制の所在」の周辺領域の概念との関連性についても、時間的連関性が低い群を対象にした研究が望まれる。また、本研究で行えなかった抑うつリアリズムや出来事の予測（仲由・古川, 2004）の視点も取り入れられる可能性もある。加えて個人の持つ時間感覚は非常に多種多様な様相をとることがわかったので、今後は量的研究のみにとどまらず、インタビュー調査などの質的研究取り入れることの可能性もうかがえた。

## 引用文献

Beiser, M., & Hyman, I. (1997). Southeast Asian refugees in Canada. In I. Al-Issa, & M. Tousignant (Eds.), *Ethnicity, immigration, and psychopathology*, (pp. 35-56). New York: Plenum.

Burger, J.M. (1984). *Desire for control, locus of control,*

and proneness to depression, *Journal of Personality*, 52, 71-89.

Cottle, T.J. (1976). *The Circle Test: An Investigation of Perceptions of Temporal Relatedness and Dominance* *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58-71.

鎌原雅彦・樋口一辰, 清水直治 (1982). *Locus Of Control 尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討* *教育心理学研究*, 30, 302-307.

神谷俊次・伊藤美奈 (2000). *自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析*, *心理学研究*, 71, 96-104.

日瀧淳子 (2008). *高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討 - 時間的態度と精神的健康との関連から -* *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 1 (2), 11-16.

日瀧淳子・齋藤誠一 (2007). *青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連* *発達心理学研究*, 18, 109-119.

笠原 嘉 (1996). *軽症うつ病* 講談社現代文庫

北川東子 (2002). *ハイデガー存在の謎について考える (シリーズ哲学のエッセンス)* 日本放送出版協会

水口禮治 (1984). *人格構造の認知心理学的研究* 風間書房

仲由千春・古川真人 (2004). *抑うつ傾向が将来の予測の正確さに及ぼす影響*, *学苑・人間社会学部紀要*, 761, 98 - 105.

村田直子 (2012). *自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察* *大阪大学教育学年報*, 13, 51-61.

奥田雄一郎 (2014). *大学生の時間的展望の時間的変遷 - 若者は未来を描けなくなったのか? 共愛学園前橋国際大学論集*, 13, 1-12

佐藤裕樹・岡本裕子・杉村和美 (2012). *時間的連関性と時間的展望体験が抑うつに及ぼす影響* *広島大学心理学研究*, 12, 61-70.

島 悟・鹿野逢男・北村俊則・浅井晶弘 (1985). *新しい抑うつ性自己評価尺度について* *精神医学*, 27, 717-723.

嶋野重行・菅原正和・大浪瑠夏 (2003). *時間的展望が向社会的行動に与える影響* *岩手大学教育実践総合センター研究紀要*, 2, 133-140.

白井利明 (1991). *青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連* *心理学研究*, 62, 260-263.

白井利明 (1994). *時間的展望体験尺度の作成に関する研究* *心理学研究*, 65, 54-60.

白井利明 (2001). *希望の心理学* 講談社現代新書

杉山 成 (1995). *時間的展望の関連要因に関する研究の動向* *立教大学心理学科研究年報*, 38, 39-

52. 杉山 成・神田信彦 (1996). 青年期における一般的統制感と時間的展望 - アパシー傾向との関連性 - 教育心理学研究, 44, 418-424.
- 高橋雅春・高橋依子 (1986). 樹木画テスト 文京学院都築学 (1999). 大学生の時間的展望 - 構造モデルの心理学的検討 - 中央大学出版部
- 都築 学・白井利明 (2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 山崎理央 (2009). 抑うつ傾向と時間的展望との関連についての検討 福山大学人間文化学部紀要, 9, 87-97.
- 2015. 1.30受稿, 2015. 3. 7 受理-

## The relationship between time perspective and depression from the relationship of locus of control

Takahiko SAITO (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Tadanori INOUE (*Tokyo Seitoku University*)

Depression has become one of major mental disease in recent years. It may lead to suicide feelings, but lead to an opportunity that hits a question "what is one's existence?". In addition, it is said that existence continuity of selves is connected with a time sensation. Thereby, one of area of clinical psychology studies, there a time perspective, create meaning such as individual past, present and future. In a research area of the studies, many researchers have been investigated the relationship between time perspective and depression in the past. That was why this research intended to consider the relationship in the point of view of locus of control which was started from an incentive theory. At first, the circle test with the free description was administered to university student to confirm the validity of the circle test that be able to measure time relatedness. As a result, personal time relatedness was projected by a circle test. Then, to investigate tripartite relations of time perspective, locus of control, and depression, the inventory survey was administered to university students. The result analyzed by structure equation modeling, locus of control and depression had a negative correlation, and they had an influence on the time perspective, which had a significant impact on future. In addition, it has been said that the more the time relatedness is high, the more the depression is low. Therefore, this paper analyzed two factor analysis of variance for the purpose of confirming a possibility of effect of low time relatedness. Research participants were the university students who answered low time relatedness at the inventory survey, time perspective of present variable, and depression was showed us as an independent variable. As a result, it was found that both interactions were not significant. Thus, it was suggested about the possibility of other variable factors by keeping lower state of time relatedness.

**Key words:** time perspective, locus of control, depression, circle test, university student

*Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University*  
2015, Vol. 15, pp. 75-82